

東京都新宿区 新宿せいが子ども園

第13回 成長展

今年度のテーマ「新宿」

第157号 2020年3月2日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていくよう
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

『成長展』

昨年は会話の中の「察する力」がテーマのようでしたが、今年は、
相手に自分の気持ちを伝えるなどの『表現する力』に目を向けて、
クラスごとに子どもたちの成長が紹介されていました。

また、「ほけん」からも「表現する力」について研究発表がされていました。人の体の部位の名称を認識していて、それをいつから言葉で表現できるか、発達の経過とケガをした時の表現について映像からの発表も行われていました。

今回のレポートでは、成長展についての考え方について、
新宿せいが子ども園の園長 藤森先生からお話し頂いた内容を
お送り致します。

昨年の成長展の準備について、せいが職員へインタビューした記事も
ありますので、ご興味のある方はこちらのレポートも合わせてご覧ください。



第13回 新宿せいが子ども園「成長展」 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さん今日はお疲れ様でした。今ご覧になってどう思われたかと思いますが、成長展は色々な意味があります。まず、成長展は行事の一つです。行事というものを、園はどういう位置づけをするか。例えば、あまり負担が大きいから行事を減らしていく所がありますし、行事を見直してどういう行事がいいかもあるが、一つは私が考えているのは、むかしの行事は、年中行事には冠婚葬祭があるが、なぜそれがあるかというと、農家は毎日が単調で、その単調な中で一つの生きる喜びや、生活にリズムをつくるためにメリハリを入れたと言われている。年中行事は単調な生活の中に特別な日、単調な日々を日常のことをケと言います。今遣われているのは、インスタンとみそ汁の夕餉や朝餉、ケと言いますね。特別な晴れの日、晴れ着や、晴れ舞台。日常の中に入れて、生活をする日々の喜びを表す中で、行事が一つそういう意味を持てないか。行事が、日々の生活の中のメリハリとして位置付けられないかがある。

—大人主体？—

行事を見るとき思うのは、「私の園は子ども主体なのか？」と思う位、大人主体ですね。大人が割と楽しんでいて、子どもそっちのけで楽しんでいるのを見ると、大人主体？と思った時に、昔の年中行事は子ども主体なのか？大人が祭り向かって、日々準備をして、大変なことや遅くなることもあるが、それを楽しみに準備している。それを子どもたちが見ながら、自分たちもワクワクしている姿を見たときに、うちの行事はそれがあるのかもしれない。大人が楽しんでいるのを見ながら、面白いことが起きるかなとワクワクする感じ。子どものためにという感じではなく、自分たちが楽しむのも悪いかなと思いました。こういう形をつくる上で色々考える上で思ったのが、昨年クリスマスイブに保護者からクリスマスカードが届きました。これを開けてみたら、保護者からびっしり園の感謝の気持ちが書かれていました。保護者に感謝されることはいいことだが、感謝され嬉しいのではなくて、保護者はどこに園を評価しているんだろう？というと。こういうことがあります。まず保護者がどう並べたか分からないが、上から読んでいきます。一人目は「いつもお世話になっています。忙しい中、お楽しみ会や運動会のイベントで、子どもの成長を見せてくれてありがとうございます、親と共に子どもの成長を見守って下さり先生たちに感謝しています。」二人目は「いつも行事に参加させて頂く度、先生たちの真心こもったアイデアに感動しっぱなしです。毎日そう接してくれていると思います、いつも感謝しています。」これを二人読んだだけでも行事の評価が高く、保護者は行事を観ているのだ、今の二つが特徴だが、子どもの成長が見えることが一つ。二つ目が先生方のアイデアに感動しますということで、子どもの立派な姿を見せることはないんですね。多くの行事はそういうことがある。この成長展のもともとは作品展なんです。作品展に行くと、子どもの素晴らしい作品を見たとかが多いと思います。成長を感じたというのはあまりない。親は子どもの成長に感動する、ということの評価が高い。「お楽しみ会、運動会の企画に先生方の工夫に毎回工夫されている。先生方が楽しんで企画されていることが伝わり、こちらも嬉しくなります」。先生たちの楽しさが見えるというんですね、先生たちが頑張って、大変でやっと作った感動よりも、楽しそうに準備することに感動してくれるということです。私たちは気を付けないといけないことです。これは私たちが気を付けないことで、頑張って子ども仕込んで、素晴らしい姿を見せたから感動するだろうというのは、感動する親もいるが日々の成長を見たとか、先生たちが楽しんでいるとか、工夫していることに私の園では評価が高いで

す。こういうことがあります。ある保護者から「保育指針を日々の現場に落とし込んで、お仕事されている先生方の姿にいつも学ばせてもらっています。」保育指針を現場に日々落とし込んでいる、という言葉が保護者から出るのかな?どうして指針を知っているのか。それは常々それを言っているんです。今日の成長展の評価の仕方も5領域で子どもの姿を見せてています。指針の中に領域が書かれている。それは子どもを見る切り口ですよ。行事のたびに、この行事は指針の領域の表現領域をお見せしていますとか、私たちの根拠は、保育指針や子どもの権利条約とか、そういうことを基本している。個人の想いでやっているわけではないことを伝えていることもわかってくれています。現場に落とし込んでいる姿には、「子どもへの声のかけ方、視線の方向、発達状況に段階にあった対応の仕方」を保護者は評価しています。それから見守るに対してもこう捉えています。「せいがの先生方からは、子どもの成長を信じて待つことを教えて頂きました。未熟な親なので、焦ってしまうことばかりですが、植物を育てるように、見守り続けることでその子なりの花が、その子のタイミングで咲くことを学びました。季節ごとのイベントでは、日常では気づきにくい子どものこれまでの成長、これから希望に目を向ける機会を頂きました。先生方が楽しんで企画している姿が印象に残っています。せいがの子どもたちがクリエイティブで、前向きで安定した大人に囲まれていること、生活していることを光栄に思います。」とありました。最初「せいがの子どもたちはクリエイティブで、前向きで安定しているんだ」というと思ったら、「そういう大人に囲まれていることに評価している。」保護者は、自分たちを犠牲にして尽くすことを望んでいないんですね。生き生きと生活し、先生たちが安定していること、それは子どもに限らず、先生たちの情緒の安定も伝わっているのだと思います。

—成長展の準備—

今日の成長展をご覧になってどう感じたか分かりませんが、私の園は20:30までの保育なので、保育室を使うところは当然、20:30以降にやらないといけないですよね。しかし、終わったのが大体20時くらいに終わりました。終わって解散するときに、「まだ保育している子がいるね！」とそんなに遅くなっていない。その辺の準備が上手で、あまり遅くまで残っていない。それが保護者にとっても、だからと言って手を抜いてない。段どりのよさ、全部吊るしているものは実は、1週間前から吊るしてあって、幕上げているだけで、前日はそれを下ろすだけ。全体で保育する場所は、下ろせばいい所だけの所で集めて保育をして、子どもが減ったら下ろすだけと段取りがいいということは、心の余裕があるから。成長展になるが、もともとのきっかけは、よくある作品展です。前の園の時に作品展というと忙しいのは子どもたちで、作品展が近づくと絵を描くし、造形をするし、子どもたちは大変だった。それからもう一つは、0から作品を作ると、0際は点を書いたりしますよね。これをいかに作品のように見せるかが結構、作品展の課題だった。子どもは作品を書いているつもりなのに、適当に書いたものを切り抜いて、車に貼ったりして展示をしていた。その時に、乳児にとって、子どもにとって作品は何かを思った時に、指針は平成元年の時に大きく変わりました。それまでは領域は子どもたちに教える内容で、実は絵画制作があったが、全国一斉に絵画制作をさせる。遠足から帰ってきたら、遠足の絵をかきましょうとか、母の日はお母さんの顔を書きましょうとか、教科の絵のように教えていた。音楽リズムもあり、全員で合奏させたりしていました。元年に大きく方向が変わりました。乳幼児教育は、環境を通して発達させる場所となり、領域は発達をするための切り口であると変わりました。それなので、絵を描く事、音楽をすることではなくて、それを通して、表現力を発達させるに変わった。これからの時期、お雛様の人形を作りましょうとなったら、それを作ることが目的ではなくて、作ることを通して何かの発達をさせること。ハサミを使う力とか、折り紙を折ることで、それを通して発達をさ

せるときに、ハサミを使おうとしたら、作るの嫌と言ったら、お雛様をつくらなくても、恐竜をつくらせてもいい。ひな人形の作り手にしたいわけではないので、その子が好きなものを通して、はさみをしてもいいというようなことを考えたときに、成長展の作品展は何なのか。子どもが成長していく姿が作品だろう、それをクローズアップさせることが、本来の作品展だろうと思った。1年間の成長を見せることで、作品展は大体、文化の日に行っていたものを、年度末にこういう形を考えたこと。どうしても年齢でクラスを作っていると親は、どうしても隣の子と比較してしまいがち。私たちの保育は、年齢として何歳は何ではなくて、その子の発達を連続して育ててようなので、親にも他の子がどうかではなくて、4月からこう成長したと見せたらいいだろうと。他の子と比較しないで、自分の子の発達を見せようということが次の趣旨でした。作品は、成長そのものであり、その成長は、その子なりの成長の連続を親に見せることだろう。それを切り口として、5つのポイントとして見せていく。それが年間の行事を通してだけ、成長展としてはそうです。ということが大きな流れで、それが一つの意図です。

—成長展のもう一つの意図—

今朝の打ち合わせ会では、もう一つの意図、私たちの保育者の意図、皆さんならそう見て欲しいですが、うちの園では、来年の担任を発表しています。自分が来年、持つであろう子どもたちの作品を見てください。絵がこんな風に書けるようになってきている、来年自分が持つたら、その連続として接続を自分のクラスでしていってほしいと言ったんです。これは学校への円滑な接続ですが、学校だけでなく、次の年度へ円滑な接続を考えないといけないんです。次の年度は、この担任になりました、ここでやりましょうとか、ここで完成させましょうではなくて、発達を繋いでいかないといけない。それをするために、自分が持つであろう子どもたちが、どう成長してきたかを一人ずつ見てください、と親と違う見方です。それが一つです。それから言語の発達は、環境が影響し得るんです。シルエットで人、車、犬が貼ってあるが、小さいうちは、「これは?」「ひと、くるま」から、だんだん話になって、「人が車に乗って出かけているところ」というが、私の園の八王子の園で、今年に限ってか分からぬが、シルエットの年長の言葉が、車は、乗って出かけるではなくて、ぶつかるもの、車に轢かれケガしたとか、ほとんどの子がそういう言葉だった。うちは二人位だったが、去年1年のニュースが車にぶつかったニュースが多かったので、親が車に気を付けなさい、怪我をするよという会話が多かったのではないか。ニュータウンは車の移動が多いかもしれないという話なって、子どもの生活とかが見えてくる。もう一つは子どもの環境を見るのにも会話ですね。うちでもあって、最近掲示していいのだろうかと困るのがシルエットの中で、お父さんとお母さんがけんかしているところとあって、今の子どもたちは家でどういう生活をしているかが言葉の発達だけではなくて、保育にどう生かすかがあります。表現の中で中々保育者がなかなか思いつかなかったので、私が行ったのだが制作の所を見ましたかね?制作は、今年は「表現」がテーマなので、何を制作を使用かと相談を受けた。私はその時に保育指針の表現のところ、最初に書かれているは、「物には色、形、手触り、違いに気づく」というのが、表現の基本に書かれています。ということで、手触りに気付くように、手触り絵本をつくったらということで、ほわほわとか、ざらざらとか、オノマトペという表現をするが、それをフワフワの所にうさぎを貼るとかをしたと思います。手触りは手の感覚だけではなく、言葉として日本は独特なオノマトペという表現力がありますので、絵本を作ることで体験する。もう一つ、ここで調査していたと思います。一つの形と色と大きさの違うものを、同じ仲間で並べなさいとしたときに、何で分けるかを年齢で分け張り出していたと思います。最初にどれで分けるか。実際の結果はあるんですね。今日、園児はどうしたか分かりませんが、小さいうちは色で分け5、6歳になると大きさで分け、小学校へ行くと形で分けるとあるが、

小さい子が色で分けたら、1歳のブロックを色の箱を分けて、色で同じ色同士に分けなさい。もし子どもが大きさで分けたのが最初なら、大きさで分けたらどうかと、子どもがどこから認識するかを日々の保育の中の仕舞い方や、気づかせ方、集合の概念をそこから導入して入るための調査をするんだよと言ったんですね。興味・関心だけでやっているのではなくて、保育の中にそういう成果を入れていく。

—保健が大切にしていること—

はっきりしたのが保健ですね。保健は時間がなくて、よく読まれていないかもしれません、2歳の子を連れて先生が「保健の先生、この子が柱に頭をぶつけた」と言おうとしたら、静止して、子どもに、

先生：「どうしたの？」

子ども：「ぶつけたの」

先生：「どこに？」

子ども：「柱に」

先生：「どこを？」

子ども：「ここ」

先生：「ここって何という所？」

子ども「頭」

と言わせることをした。そうしたところ、内臓は意外と知らなかった。割と心臓は知っていた。子どもの会話の中で、子どもは言葉を覚えるんですけど、会話に出てこないのは内臓なので、来年、人体模型を買ってほしいと言われているんですね。調査の中で、次の保育の課題が見つかってくるんですね。データで面白かったのが、どの言葉で何歳で何%分かるかというと、年齢と共に次第にわかりますよね。それなのに、膝だけは、1、2歳の方が知っていた。「何で知っているのですかね？」と聞かれたので、「部屋に行ってごらんなさい」。1歳はつねに先生はまず、「お手々は膝に」というので、聞いているんですね、それから歌で、「手はお膝」というが、「膝」という言葉が出る。「頭、肩、膝ポン」というのでも「膝」が出る。それから、「肘」が出ないというので、「頭肩膝ポン」というのを「膝肘何とかポン」とかを入れた歌を2番3番にしたらといって、歌から場所を覚えさせようとか、保育を生み出していくことも成長展でも役に立ちます。

—プロセスの見える化—

一番影響するのが動画。保護者に「見守る」というのがなかなか伝わりにくいです。一般の人にも、見てるだけと言われるがよく、「見えない学力」「見える学力」と言います。学力は見えない私からすると、学力は最終結果ですよね。学校教育はどうしても、結果が見えるか、見えないかを議論するが、幼児教育の見える化しないといけないのは、プロセスなんですね。結果ではなく、プロセスが大事な仕事なんです。そのプロセスをどう見せていくか。結果は、保護者は見ればわかるが、プロセスは見えませんね。「見守る」ということは結果ではなく、プロセスの関わりなので、これを保護者にどう説明して言うか。O E C Dもプロセスというが、人にプロセスは伝わりにくい。それを見せる一つの手段が、保護者に見せるこの動画なんです。子どもたちがこんなことを知っているのだ、「見守る」と言っても、日々こんなことをしているということを見せていく。プロセスの見える化ですね。成長展はプロセスを見せようとする。作品展は、結果を見せ

るんです。その違いでそれを見せる動画です。保護者は、先生たちはこうしているんだから、離れているんだと理解するんですね。その中で毎年テーマを決めて、その中で動画が色々出てくるが、全職員が撮ります。皆スマホを持っているのすぐに撮ります。1つは私が考えた研修方法です。子どもがどんな行動するかを、予測を立てた方がいいと思っています。一つの研修方法の予測検証という方法で、噛みつきがある時に、保育者が言いに来ますね。「また、噛みついたの?」というと、「そうなんです、夕方になると噛みつくんですよ」。「夕方、この子にと知っているなら、何で止めないの?」と思う。いつの時間に、どういう状況に知っているなら止めてよとなる。仲がいいのと、噛みつきは違う。時に色々なことを止めたりするのは、予測する力ですね。この子はこうしたと言われても、そうではなく、止めないといけない。私たちはテーマを設けているが、最初の頃「人を助ける力」をテーマにするとしました。職員は、ストローを一生懸命さしている子がいたら、隣の子は多分助けるだろうとカメラを向けないと撮れない。動画は、その後することを最初に撮り始めていないと撮れない。撮っていると中々助けない、普段ならすぐに手を出しが、撮っているから、もう少し待っていると助けてくれるか、だめかと繰り返すことで、子どもの行動を予測ことが出来る。這っていったら、あそこへ行って何かするだろうと思って撮る。あの動画は、テーマは年度初めに言って、職員がそのシーンが起きそうな時に撮り始めると、割といい動画が撮れ、こういうことをするということがわかってくるんです。先生たちに行動を予測する力をつける一つの方法にもなるんですね。この後起きるだろうと思って、撮ったら共有フォルダに入れて編集する。編集も大変で、いっぱい動画がある中で。時間を短くするのが大変。苦労して遅くまで残って、1年掛けて作っているが、観た人が「あの動画もらえますか?」と簡単に持って行ってしまうが、作る過程が大事なので、止めたいわけではないが、作ってああだこうだ試行錯誤することも私たちの勉強になる。そして今テーマも話題ですね。彼とは古いのであまり話していないでも伝わるのは、これから必要になる力は、講演の中で言うが「結び付ける力」。新たな価値を生み出す力です。O E C Dが、エデュケーション 2030 でも提案している一つの力です。新たな価値というのは、色々な物の価値は見つかっているんですが、これを結び付け、新たな価値を生み出す力がこれから必要といわれています。いろんな価値を結び付けるために、いろんな価値を学ばないといけない。簡単に言うと、子どもたちの引き出しを多くすること、いろんなゾーンがあつて体験する。昔だったら、絵を描きましょう、歌を歌いましょうでよかったが、これからは色々な引き出しを子どもたちに作り、結び付けていく力。ここでこの体験したということを結び付けて、関連付け、新しいものを作っていくことがコンピュータの時代になっても、人間しかできない力と言われています。もう1つ一貫しているのが、0から子ども集団が必要ということ、私の最近の主張は、少子社会になって、兄弟が少ない、地域とあまり触れない。しかし、赤ちゃんから集団が必要である。それがあるのが保育園だから、保育園では、子ども同士が育つ力が育っているんですよ、ということを保護者に伝えることなんです。働いているから預かっているんではなく、子どもにとって必要だと伝えたい。それが随所に出ています。毎年テーマは違っても、一貫した最後の結論です。子どもは、子ども集団の中で育つということです。これは社会に訴えたいことでもあります、一つの行事にはいろんな意味があります。見学者が多い中で、始まる前に皆さんに見せると、職員の帰るのが遅くなるんですね。職員から、ちゃんと説明をしてみて欲しい。片付けするのが遅くなるので、最後に私が話しておくと、下が片づけられる。どう効率的にするかです。この後、下を見てもらうと普段の保育室に戻っていると思います。それが全体のチームワークですね。全部は説明できませんでしたけど、保護者に見てもらうには、クイズ形式にして、どれが自分の子か見てもらうとか、今までテーマで貼ってあると思うんですね。これが各クラスに貼ってあったが、発達の連續性を見てもらうために、0から同じ場所に貼ろうとした。毎年、工夫しているんです。これまで0歳は0の所に貼ってあったけど、並べて貼ろうとか、掲示の仕方、貼り方、先生たちが一貫した

理念に沿って、工夫をしているので、ぎっしり詰まっていることなんです。

—終わりに—

行事を何のためにするのか。最終的に、行事はいらないんじゃないという結論ではなく、親としては、親と直接触れるためにとても大事なものなので、ただ見せるだけの行事や、苦労する行事ではなく、自分たちの学びも入る。行事を色々なところで考えてください、考えてもらえると、私たちも見てもらえて本望ですので、是非いい行事を作ってもらえたたらと思います。それは子どもにとっても、親にとっても、私たちにとっても、今日は民生委員の人も見に来てくれました。地域の方にも、うちの園がどういう風に取り組んでいるのか、地域の中で一体にしていかないといけないので、観てもらえたかなと思います。ぜひ、それぞれの園が、それぞれの地域で、子どもにとって必要な園での過ごし方ができると思いますので、お互いが見合って良いところは是非、真似して構いません。自分でやってみて、自分の園なりに変化していく。これは脳のシナプスと同じです。とりあえずいっぱい作って、削った方が効果的ですので、とりあえず真似して、うちの園ではいらないね。と削った方が早いです。それは人類の特徴ですから、一時期、真似することは避けていましたが、いいと思ったら真似をして、形を作ってもらえたるだと思います。これで話を終わります。今日は成長展お疲れ様でした、ありがとうございました。

本稿は、2020年2月22日に行われた新宿せいが子ども園の「成長展」での説明内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿3-2-11 新宿三井ビルディング2号館10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。